



写真の達人



川崎ゆきお

写真の達人がいると聞いて、高橋は合いに行った。いつもなら一人で見知らぬ町で怪しげなものを探すのが目的だが、今回は人を訪ねている。これは、この達人が怪しいからでもあるが、探索のヒントを得られるかもしれないと、真面目な考えもある。しかし散歩の達人になることが、真面目なことなのかと考えると、これこそ怪しい。

写真の達人は一人暮らしの老人で、普通の市営住宅に住んでいた。

「写真の極意ですか」

「スナップの達人だと聞きました」

「え、私はスナップのつもりで写してはいませんが」

「ああ、そうですか」

「そんな軽い目の写真家だと思われているのですなあ。まあよろしい。それに写真で食っているわけではないので、問題はなからう」

「スナップというか、散歩写真家と聞きましたが」

「ああ、皆さん好きなことを仰る。しかし、そんなに評判になるような仕事はしておりませんが」

「いえ、若い頃、コンテストの常連だったとか」

「ああ、写真雑誌が結構ありましてねえ。ほぼ毎月金賞だの、銅賞だの、佳作だのと、色々取りましたなあ。連載のようなものですよ。複数の雑誌やコンクールでね」

「はい、その頃のことを覚えてられる人達が、まだいまして、写真の達人だと噂されるのも、そのあたりからだ」と

「あ、そう」

「散歩中に写す写真の場合、被写体が問題ですねえ。僕なら怪しいものを探し出そうと懸命ですが」

「被写体は問題じゃない。そんなもの誰でも目に触れられるものだし、誰でも写せるものだからね」

「問題じゃないと」

「被写体ではなく、被写体をどう見るかでしょうなあ」

「はあ」

「だから被写体として見ない」

「ほう」

「分かります？」

「分かりません」

「出方を見るのです」

「余計に分かりません。出方って何ですか」

「乗り方です」

「え、何の」

「タッチの」

「はあ」

「私が写していた時代はモノクロでした。この場合、白と黒の間。灰色の乗り具合が大事なんです」

「グラデーションですか」

「それもありますが、質感とかも」

「木の質感とか、土の質感とか」

「いやいや、それでは木を写していることになる。それじゃ、写真になってしまう。写生だね。」

「図鑑だよ」

「あ、はい」

「分かります？」

「分かりません」

「木を写しても、木を写しているわけじゃない」

「は、すると何を」

「それらを組み合わせた絵ですよ」

「ああ、何とか分かります。理解が溶けないうちに、続けて下さい」

「自然を写しても、それは自然ではない」

「少し理解がしぼみましたが」

「別のものを現出させる」

「飛びすぎました」

「現実を見て、別のものを感じたり、見出したりするでしょ」

「ああ、理解が戻りました。それです。僕が怪しいものを探しているときとそっくりです」

「目の前のものなど見ていない」

「先生」

「何かね」

「それこそ幻想写真の世界ですね」

「さあ、それはどうだか、実際に上がってきた写真は普通の風景ですよ」

「でも、それが隠しネタとして入っている」

「ははは」

「そうでしょ、それが入っているか入っていないかで、ぜんぜん違います」

「しかし、私の写しているのはありふれた風景ですよ」

「いや、そこに潜んでいる何かを、見る人は感じているのです。しかし、具体的ではなく、何かおかしいなあと思いながら見ているのです」

「まあ、そう先走らないで」

「はい」

「全体で写すことです」

「はあ」

「個別のものにこだわらないでね」

「また、意味が飛びました」

「難しい話じゃない。写真家になれるかどうかは、その全体があるかどうかじゃ」

「じゃ、全体って何ですか」

「さあ、それは恥ずかしくて言えぬ」

「ないのでは」

「それは反応のようなものかもしれんなあ」

「感性ですね」

「その感性を発する源が、全体だよ」

「人間が大事だと」

「そこから発しておる」

「やはり、難しいですよ、先生」

「君が難しく考えているから、私も難しそうな言い回しになってしまう。そう言うことじゃよ」

「しかし、一つだけ分かりました」

「ほう」

「散歩の極意です」

「うむ、如何に」

「現実なんて見ていないってこと」

「いいねえ」

「今日は有り難うございました」

「理に走るとろくなことはない。せっかく掴んだ極意も逃がしてしまう。忠告じゃ」

「はい、忘れます」

と言うより、高橋は、殆ど理解出来ず、何も覚えていないだろう。ただ、曖昧な幻想を霞のよう
うに掴んだようだ。

写真の達人は最後に言い忘れたことがある。

「私は写真の極意を知ってから、その後今日まで一度もコンテストで入選していない」

了